

▶いけばなと池坊

いけばなは、仏前供花を発祥としていることから神仏への信仰と結びつきが深く、仏前の手向けや神仏が降臨する神籬（ひもろぎ）としての性格も合わせ持ちます。単に美しいだけの装飾ではなく、思想を含んだものがいけばなです。いけばなを伝える最も古い流派が池坊で、紫雲山頂法寺(通称：六角堂、京都市中京区)の住職が、華道家元を代々で務めています。

▶作品の背景－池坊の美と立花－

池坊のいけばなに宿る美感は、草木の自然の美しさ、いのちの輝きを大切にしています。ただ、その美感は、「自然そのもの」というよりは「理想とする自然の美しさ」といえます。池坊の原典である『池坊専応口伝』において、池坊の美感について「宜しき面影を本(もと)とし」と述べられています。あるがままの自然そのものの美から、理想美へと磨き上げることで、自然よりもより自然らしさが現れ、美の輪郭を際立たせることを旨としています。

いけばなの最も古い様式「立花（りっか）」は、天文14年（1545）『大巻并座敷荘厳図』（池坊専栄 筆）に立花の骨法が図示されていることから、この頃には立花の理論がおおむね整っていたと考えられます。

室町時代になり、建築様式に「床の間」を有する書院造が誕生すると、いけばなは客をもてなす座敷の床飾りに欠かせないものとなり、大きく発展していきます。

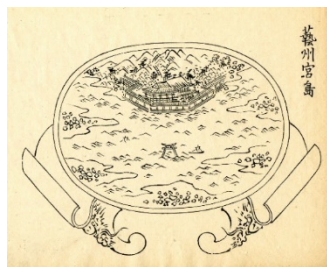
立花は、さまざまな草木で大自然の風景を表し、それぞれが一瓶の中で調和する美を追求しています。骨格の主要素である枝「役枝（やくえだ）」を前後左右に働かせることにより、立体的な構成（伸びやかさ・広がり・奥行き）となります。また、役枝は、それぞれに働きを持つことから「道具（どうぐ）」とも呼ばれます。

立花では、中心線のことを「中墨（なかずみ）」とも称し、役枝が前後左右に出る位置（高さ）を「出（で）」と呼びます。出は、各役枝の働きを尊重し明確にするため、その位置は重なり合ことはありません。



▶砂物の表現

砂物の名は、水の代わりに砂を見せることによります。砂は真っ白な寒水石の他、白川砂も使われていました。フォーマルな座敷飾りに用いられてきた立花に対し、砂物は草木の変化に富む風情を重視した様式で、盆景の一種とされる洲浜から発展したものといわれます。



盆山『盆山石圖式』より
寛政7年（1795）3月刊



嶋台『十六式図譜』より
明治36年9月15日
京都美術協会発行

池坊専好（二代）は、「砂之物は水辺近き躰なり。立花は野山水辺遠見の躰なり。この故に、砂鉢は勢（せい・背のこと）ひきく平き物を用ふるなり。（『臥雲華書』寛文11（1671）年8月写・宮内庁書陵部 蔵）」と述べられています。砂物は広大な風景を近くに見るよう、ありありと表現することを旨としています。

作品：「蓮」

素材； ポリスチレン アクリル樹脂 高吸水性樹脂 塩

花材； 蓮 新芽

立花はさまざまな草木の調和を原則としていますが、蓮をはじめ、松・桜・燕子花・菊・紅葉・水仙に限り、一種類で立調する「一色（いっしき）」と呼ばれる伝花としての立花があります。

本作品は、伝花「蓮一色」をモチーフとして、自然の理想美に潜むいけばなの片鱗を、立花の特徴の一つでもある「出」の存在を意識しつつ表現しています。

蓮における「三世（過去・現在・未来）をいける」とは、過去は朽葉と結実、現在は開葉と開花、未来は巻葉とつぼみと捉えいけ表します。本作品では、朽葉（過去）、萌芽（未来）、作品を見る人（現在）と設定し、時の流れを表現しています。

人が追求する自然の美しさとは、自然そのものというよりも、もっともらしく整えられた自然美ともいえます。いけばなでは「自然そのもの」を理想化したものが、美の一側面としてあります。本作品の雪景色においても、作者の美に対するフィルターを通した雪の理想美といえます。

作品：「砂物」

花器； 銅製 洲浜型

花材； 松（赤松、寿松、若松）、竹、梅（苔木、ずわえ）、水仙、ウラジロ、葉ボタン
ブラッシア、イオノシジューム（ももちゃん）、トクサ、スイトピー、沖縄シャガ
コプロスマコーヒー、マランタ、杜若、苔

砂物で用いる花器は、「砂鉢（すなばち）」と呼ばれています。本作品に使用する砂鉢は輪を三つ重ねたような洲浜型で、側面には波頭紋や青海波紋など、水辺にゆかりのある紋様がみられます。

小さな砂鉢で表す広大な風景は、正面から・俯瞰からとさまざまな見どころを持たせています。

※「蓮」の作品は現代の美観を表現し、「砂物」は伝統的な美観を表現しています。その対比をこの東京画廊の空間に演出しています。